

平成23年度
広島市教育センター

中学校外国語（英語）科における「書く力」を育成する 指導法に関する研究

— 帯学習での段階的指導と4技能の統合的な指導を通して —

広島市立国泰寺中学校教諭 佐々木育子

平成23年度広島県「基礎・基本」定着状況調査の結果によると、広島市の中学生は外国語（英語）において「書くこと」に課題があることが分かった。これは全国的にも見られる傾向であることから、平成24年度から全面実施される新学習指導要領では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能をバランスよく育成することが求められている。

本研究では、課題であった「書く力」を育成するために、帯時間での段階的指導を試みたり、つながりのある言語活動を実施したりするなど4技能の統合的な指導について工夫を試みた。

その結果、帯時間の指導によって「書くこと」に必要な文構造が定着したり、4技能の統合的な指導によって題材の内容理解が深まり、生徒の思考力を刺激し「書くこと」への学習意欲を高揚させたりすることが分かった。

キーワード：新学習指導要領，書く力，帯学習，4技能の統合

I 問題の所在

平成23年度広島県「基礎・基本」定着状況調査の結果によると、広島市の生徒は「聞くこと」「話すこと」「読むこと」に比べて、「書くこと」に課題があることが分かる。とりわけ「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書く」ことについて指導の改善が必要である。

上述のような「書くこと」の領域における課題は、国立教育政策研究所が行った「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」でも報告されていることから、全国的な傾向であると考えられる。

「書くこと」の領域で課題が認められる背景としては、現行の学習指導要領において、外国語（英語）科の目標が「・・・聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」と設定されるなど「聞くこと」「話すこと」に重点が置かれていたり、授業も音声指導を中心として行われていたりしたことが大きい。

平成24年度から全面実施される新学習指導要領では、「書くこと」を含め、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」の4技能をバランスよく育成していくことが謳われ、いくつかの技能を統合させた授業づくりが求められている。

II 研究の目的

中学校外国語（英語）科において、「自分の考えや気持ちを読み手に正しく伝わるように書く力」を育成するための指導法として、帯学習による段階的指導及び「話すこと」「聞くこと」「読むこと」など他の技能を統合した言語活動を仕組むことの有効性について検証する。

III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 検証授業の実施

3 検証授業の分析と考察

IV 研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 新学習指導要領における外国語（英語）科の目標について

『中学校学習指導要領解説外国語編』によると外国語科の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」と示されている。

現行の学習指導要領では、特に音声によるコミュニケーションを重視し、「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ことを目標としていたが、今回の改訂では、「読むこと、書くこと」も追加された。これは平成23年度から小学校に外国語活動が導入され、特に音声面を中心とするコミュニケーション力の素地が育成されることになったからである。中学校段階では小学校における外国語活動ではぐくまれた素地の上に、4技能を全てバランスよく指導してコミュニケーション力の基礎を培うことが求められている。

(2) 外国語（英語）科における「書くこと」の目標について

「書くこと」の目標は、「英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。」ことである。

「書くこと」については、与えられた英語を単に書き写すことなどができるだけでなく、自分の考えなどを表現するために蓄積した知識を統合して書くことができるようになることが重視されている。また、指導事項について「文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」の部分が今回の改訂で新たに加えられたが、これは内容的にまと

まりのある一貫した文を書く力が十分ではないという課題に対応したものである。

これらのことから「書くこと」の指導においては、表面的・機械的に理解し表現するだけでなく、コミュニケーションの場で駆使できるという一歩踏み込んだ能力の育成を目指す必要がある。

(3) 帯学習での「書くこと」の段階的指導について

Rivers & Temperley(1978)は書くことの指導について、以下の4段階を提案している。

表1 書くことの4段階

I Writing down (書くための規則を学ぶために、すでに書いてあるものを写すこと、また読んだり、聞いたりしたものを文字を通して再現すること。)
II Writing in language (構文の要素や語彙を多様な方法で操作、展開、変形、言い換えを行う。)
III Production (既習の言語材料を使ってモデル文などを参考にして文章を書くこと。)
IV Expressive writing or composition (実際的な目的のために創作的に文章を書くこと。)

まず、「書き写し」や「ディクテーション」について指導することで、モデルとなる英語の文章に慣れる段階である(I)。次に、構文や語彙などの変形操作を繰り返し行う段階である(II)。生徒が単語や文構造を学習したうえで、IIIのモデル文を参考に自分の考えを表す英文を書く活動に移っていけるようにすることが重要である。

(4) 「書くこと」と「聞くこと」「話すこと」「読むこと」の統合的な指導について

従来は「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」を個別な技能としてとらえ指導することが多かったが、実生活で英語が使用される場面においては、「聞いたことをメモしたり」「読

んだことをまとめて書いたり」「書いたことをもとに話したり」するなど、技能は有機的に連動している。英語を指導する場合においても実際の使用場面に即した形で活用させることが効果的である。吉田(2007)は4技能を統合的に指導することで「『単語と文章の繰り返し』と『想起』を常に活性化させることができ『書くこと』への自動化が期待できる」と述べている。

また、単語や文法の知識が豊富で正確であったとしても考える力がなければ表現するという行為には結びつきにくい。「書くこと」に必要な思考力は教科書の内容を「聞いて書いたり」「読んで書いたり」「書いたものをもとに話したり」することで醸成されると考えられる(図1)。さらに、実際に英語を「活用する」場を提供することで、自分の考えや気持ちを英語で書きたいという意欲を喚起することも期待できると思われる。



図1 4技能を結びつける思考力のイメージ

2 検証授業の実施

(1) 検証授業

広島市立A中学校第2学年(38名)を対象に、単元名「Let's Read 2: Try to Be the Only One」(New Horizon English Course 2)について学習指導計画(全8時間)を作成し、平成24年1月11日~24日の期間で実施した。

学習指導計画の作成にあたっては、帯時間の指導と4技能の統合的な指導について以下の(2)及び(3)の工夫をした。

(2) 帯時間における指導の工夫

ア 「自分の考えや気持ちを書く」ために”I think that ~ because ….”の文構造を定着させることを目標として、この文構造を含む文を書き取らせたり、日本語に合う英文になるように空所をうめさせる練習問題に取り組ませた。

イ 「自分の考えをもつこと」「自分の考えを表現すること」に慣れさせるために、まず写真を見てその絵をどう思うか”I think it’s ….”の文構造を用いて書かせた(図2の第1時)。次に”Do you like A or B?”の質問に対する答えを書かせ、二者択一の形で「自分の考えをもつこと」に徐々に慣れさせた(図2の第2時)。その後、第2時で選んだものについて”I like ~because…”の文構造を用いて理由を付け加えて書かせ、それに続く文を、文のつながりに気を付けて書かせた。これは理由を述べることと、1文から2文へと文をつなげて「自分の考え」を表現することに慣れさせるために行った。

(3) 4技能の統合的な指導の工夫

第1時に物語の内容をOral Introductionで聞かせながらメモを取らせた。第2時にはそのメモを

もとに物語のあらすじを把握させるために、ワークシートを用いた。第3・4時ではさらに細かい読み取りをした後、主人公の気持ちになって音読練習を行った。第5時では読み取りをもとに要約文を書き、それを暗唱した後、班内で発表し合わせた。第6時はそれまでの学習をもとに、主人公に対する自分の考えや思いを書かせ、第7時には前時に書いた文章を班の中で読み合い、修正を行わせた。

「聞いたり」「話したり」「読んだり」「書いたり」する言語活動は直線的、羅列的に進むのではなく、単元の最後の「自分の考えや思いを書く」という目標に向かって積み重なっていくイメージで組み立てた。例えば「聞いて書く」、「聞いて書いた」ことをもとに「読む」、「聞いて書いて読んだ」ことをもとに「話す」というように言語活動を配置した(図2)。

(4) その他の工夫

毎回授業の終わりに自己評価シートを書かせた。授業全体に対する評価とともに、「書くこと」に焦点を絞った自己評価をすることで、目標

時	学習内容	4技能の統合	「書くこと」の段階的指導
1	・ ひろしま型繰り返し教材(p.98) 書くことの帯学習 (絵や写真を見て、形容詞で表現)	聞 ↓ 書	I II
	・ 本文内容理解 Round I (教科書pp.68~71)		
2	・ ひろしま型繰り返し教材(p.99) 書くことの帯学習 (自分の意見をもつ)	↓ 読	I II III
	・ 本文内容理解 Round II & III (教科書pp.68~69)		
3	・ ひろしま型繰り返し教材(p.100) 書くことの帯学習 (自分の意見に理由を付ける)	↓	I II III
	・ 音読(教科書pp.68~69)		
4	・ ひろしま型繰り返し教材(p.101) 本文内容理解 Round II & III (教科書pp.70~71)	読	I II
	・ 音読(教科書pp.70~71)		
5	・ ひろしま型繰り返し教材(p.102) 英文で自分の考えを書くための準備	書 ↓ 話	I II III
	(1) 穴埋め問題で要約文を作成 (2) 要約文を暗唱 (3) ピクチャーカードを見ながら要約文を言う練習、発表		
6	・ 英文で自分の考えを書く	↓ 書	IV
	(1) 前時の要約文の復習 (2) 自分の考えを表す英文を作成 「新垣さんのことをどう思うか。新垣さんのモットーをどう思うか。」		
7	・ 英文のフィードバック	↓	IV
	フィードバックを踏まえて英文の書き直し (1) 前時に書いた英文からよいものを紹介 (2) 表現の違いなどを共有		
8	・ 発表 ピクチャーカードを見ながら、あらすじと自分の考えを言う練習、発表	話	

図2 学習指導計画

成就感を生徒がもち、次の授業への意欲付けになるようにした。

3 検証授業の分析と考察

(1) 自己評価シートから分かる「書くこと」の活動に対する成就感

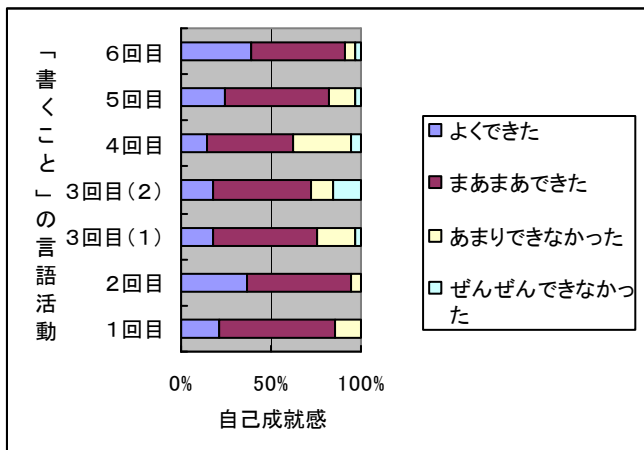


図3 生徒の自己成就感

図3から帯時間の「書くこと」の活動の3回目と4回目は「よくできた」が10%台で成就感が低いことが分かる。3回目では(1)「理由を付けて自分の考えを書く活動」と(2)「その文に1文以上付け加えて書く活動」、4回目では「要約文を書く活動」を行っており、生徒はこれらの活動に難しさを感じていたことが分かる。しかし単元の最後に書いた英文を分析すると、自分の考えを理由を付けて述べるのができた生徒の割合は96%であったことから、生徒は「書くこと」の活動に徐々に慣れていったと考えられる。

(2) 生徒の変容

ア 文構造の定着

自己評価シートの記述に、第2時の授業では18.2%の生徒が「理由を付けて書くのが難しい」と記述していた。しかし、第3時の授業ではこれらの生徒全員が理由を付けて英文を書くことができていた。また、この授業については「前の授業でできなかったことができた」とか「難しかったけど頑張った」など、難しい課題に対してあきらめ

ずに取り組もうとしていたと思われる記述が45.5%の生徒に見られた。

イ 物語の深い内容理解

4技能の統合的な指導において、聞き取り活動と読み取り活動での平均点(10点満点)は表2のような結果を示した。

表2 ワークシートの平均点

第1時	Listening	6.0
第1時	Listening	5.7
第2時	Reading Comprehension (T or F)	8.0
第2時	Reading Comprehension (Q & A)	7.0
第4時	Reading Comprehension (T or F)	7.0
第4時	Reading Comprehension (Q & A)	5.3

第4時のComprehension(Q & A)は物語の内容に深く入り込むための設問であった。10点満点の問題に対して平均が5.3点であり、半分程度の理解であった。この時点では主人公の心情を読み取り、自分の考えをもつまでにははいたっていなかったと考えられる。

しかしこの後、音読練習において「気持ちを込めて読む」ことを目標に活動を行ったことで、内容について考え、主人公の気持ちを想像する時間をもつことができたのではないかと考える。また自己評価シートから「読むのが難しかったけど勉(主人公)の気持ちになれた」、「気持ちを込める!」、「気持ちを込めるのは難しい」など主人公の気持ちになろうとしている様子が31.5%の記述から読み取れた。また、「いいお話でした」、「勉さんの言葉、すごくいいと思う」、「勉さんの歌が聞きたい」など、物語の内容を味わっている様子がうかがえる記述も現れてきた。

「聞いたこと」「読んだこと」を「気持ちを込めて音読する」ことで、内容理解が深まっていったと考えられる。

ウ 要約文とその暗唱

音読練習をした後は、物語全体を要約文にまとめる活動を行った。生徒にとって要約文を書くのは初めてであったので、空所補充のワークシート

を用いて取り組みやすくした。

要約文を書くことで、物語全体の流れを確認し、語句や文構造の復習をし、次の段階である「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書く」活動にスムーズにつなげていくことができたと考える。

エ 要約文の発表

空所の答え合わせをただけでは、生徒はその英文を使うレベルに到達することはできないため、「自分の考えや思いを書く」ための材料として要約文を暗唱させた。初めは難しく感じていた生徒もしっかり暗唱することができ、自信をもつことができた。

自己評価シート「空所に適切な単語を入れて要約文を書くことができましたか？」という質問に対して「よくできた」15%、「まあまあできた」47%、と「書くこと」の活動の中では肯定的評価が最も低かった。しかし、単元の最後に書いた英文では、この要約文から必要な文や表現を引用し、自分の考えや思いを書いた生徒は79.4%であった。これは要約文を完成させる活動は書いた時点では難しく感じられたかも知れないが、その後、要約文を暗唱し、班の中で発表し合う活動をしたことで、要約文が「自分が使えるレベルの英文」へと昇華していったことによるものと考えられる。

例えば生徒Aは要約文を書く活動では、ワークシート(図4)で分かる通り、単語の間違ひも多く内容理解も十分ではなかった。しかし、その後書いた英文では文構造に間違ひはあるものの、要約文で出てきた文・表現を使い「自分の思いや考えを相手に正しく伝わるように」書こうとしている様子が見られる(図5・6)。

(3) 個人の変容

生徒を成績順に上位・中位・下位の3つのグループに分類し、自己評価シートの記述がどのように変化したかを分析した(表3)。上位の生徒は「理由を書くのが難しかった」という記述から「難しかったけど面白かった」に変化していた。中位の生徒では文法的に正しいかどうかを気にしている生徒が多かった。しかし、自己表現をする

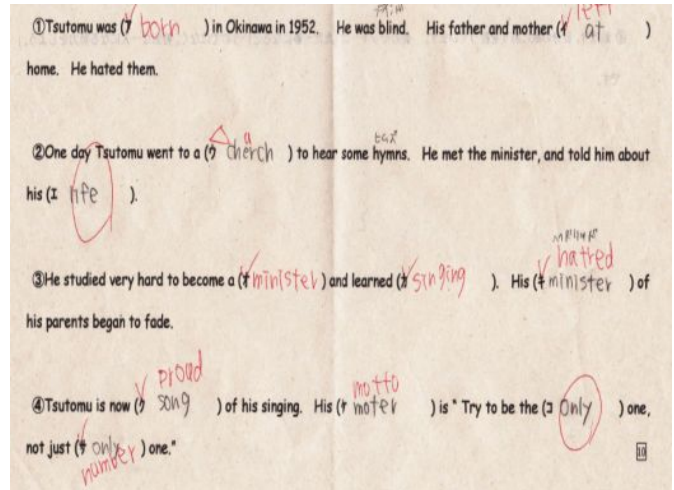


図4 生徒Aが書いた要約文

要約文の暗唱と班内での発表

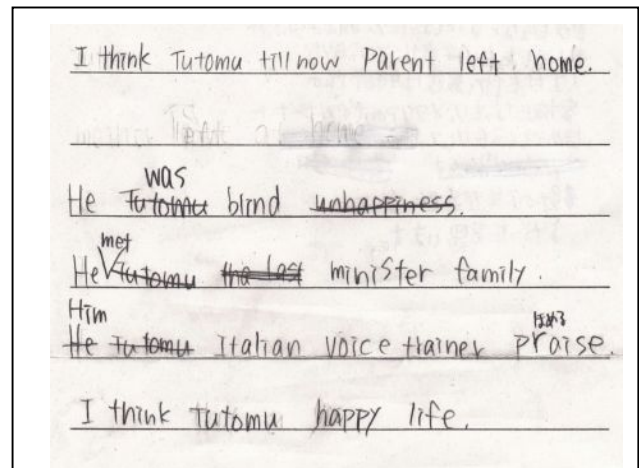


図5 生徒Aが書いた英文(1回目)

I think Tutomu till now Parent left home.
He was blind.
He met minister family.
Him Italian voice trainer PRAISE.
I think Tutomu happy life.

図6 生徒Aが書いた英文(2回目)

表3 自己評価シートの記述内容の変容

		1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目
上位	生徒B	普段は何気ない風景だけど、その景色がどのように見えるかを改めて聞かれると難しかった。	どちらか選ぶのは簡単だったけど、理由の文章を書くのが難しかった。	今日はよく活動できたと思う。自分で英文が書けてうれしかった。	適切な単語を入れるのは簡単だった。でも、覚えるのが難しかった。	難しかったけど面白かった。もっと英語に慣れておきたい。	一度書いた文の直すところを見つけるのは難しかった。もっと気をつけるようにしたい。
中位	生徒C	難しかった。全く分からない。	いくつかの意味のある単語を覚えるのが難しいと思った。	単語と単語のつながりに何をを入れるのか、どの順番か分からない。	単語は読めたけど覚えられないんだと分かった。	書き方がさっぱりだった。文法は難しい。	be動詞のisの使い方がやっと分かった気がした。楽しかったかもしれない。
下位	生徒D	初めて英語辞典を長く使った。いろいろ調べて良かった。	辞書を使って調べたりした。	(授業必須道具の)6点セットを忘れた。次からは忘れないようにする。	声に出して英文を読む。	もっと勉強する。字がきたない。勉強する。	思ったことをいっぱい書こう。

過程で文法を身につけていく楽しさについて記述していた。下位の生徒は辞書の活用について述べている生徒が多かった。また、難しさを感じながらも自己表現したいという願いが読み取れた。

これらのことから、生徒の学力に違いがあっても、それぞれの生徒が自己成就感をもつことができたことが分かった。

V 研究のまとめ

成果

- 帯時間に「書くこと」について段階的に指導することで、文構造の定着を図ることができると分かった。
- 4技能の統合的な指導を行うことで題材の内容理解が深まり、その後の生徒の思考を促し、「自分の意見を書く」力を高めることにつながっていくことが分かった。
- 帯時間の段階的指導と4技能の統合的な指導を組み合わせることで、生徒の学力にかかわらず、書く力を向上させるための意欲付けについて一定の効果があることが分かった。

課題

- 今回の検証授業は8時間という短期間で実施

したため、成果の客観性を高めるためにも引き続き検証を進めていく必要がある。

- 4技能の言語活動をどのような順序・組み合わせで配置することが最も効果的で、生徒にとっても取り組みやすいのか、さらに精査していく必要がある。
- 「書く力」を向上させるためには、「考える力」も必須であり、生徒の思考力・判断力を伸長させる発問や言語活動の在り方について、さらに探究していきたい。

参考文献

- ① Rivers, W. M. & M. S. Temperley 1978 “Language Activities in the Classroom”
- ② 村野井 仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店 2006年
- ③ 文部科学省『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂出版 2010年
- ④ 吉田春世『TEACHING ENGLISH NOW』Vol.10 三省堂 2007年

